

旅は道連れ



奈良迫 英光

2024年のインバウンド客数は、コロナ前を上回り、3560万人余りと、過去最高になった。日本人の海外旅行者数を大きく上回る。特に東アジアの中国、韓国、台湾、香港から8割を占め、ここ数年は欧米系の伸びが顕著である。「四季折々の美しい自然」、「日本食の無形文化遺産登録」、「祭りや伝統文化」、「安全・安心な国、秩序ある国民性」等日本の魅力が浸透していることなどがあげられる。夕刻甲突川べりを散歩していると、外国人夫婦が仲良く腕を組んで散歩していたので声をかけると、オーストラリアから来て外資系ホテルに4泊しながら世界遺産や鹿児島

島市内の街歩きを満喫していると言う。海外からのクルーズ船は夫婦連れがほとんどで、長い船旅を楽しんでいる。

鹿児島もクルーズ船の人氣が定着し、今年は過去最高の入港が予定されている。

ところで先日初めての海外旅行で、ヨーロッパを旅した退職間もない夫婦を訪ねた。土産話を聞くためであつたが、道中の話になると奥様が開口一番「二度と主人とは旅行には行きません」と不機嫌な様子、わけを聞くと夫と旅行に行っても楽しいことは一つもなかったと。「朝早くからごそごそ起きだして、日本宿に泊まったかのようにお茶を催促する」、「観光地では、見学することもなくバスから下車せず寝ている」、「フリータイム中に二人でショッピングに行くと、退屈そうで早く済ませろと急がせる」、「夜は日本から持ち込んだ焼酎を部屋で晩酌して、外食に行く気配も

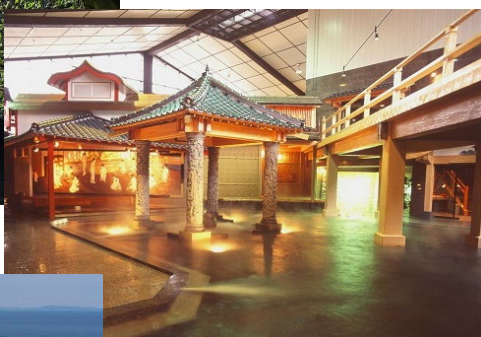
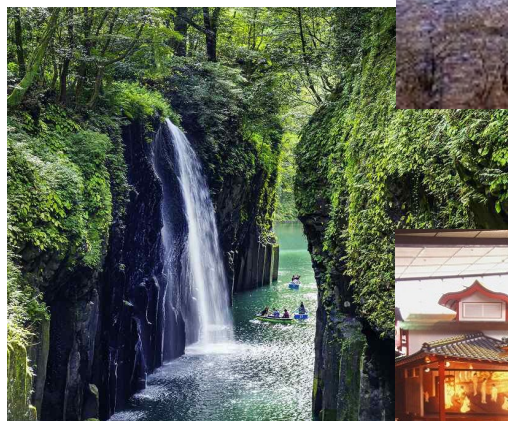
ない。」「風呂から上がり余生の過ごし方を語りあいたいのにいびきをかいて寝ている」等々日本での生活とほとんど変わらず、異国情緒を楽しむ気配も感じられなかったという。奥様の怒りがよく理解でき、これでは何のために海外旅行に行ったのか、子育ても終わりやっと二人の時間が取れたのにと、嘆きの言葉ばかりについて相槌を打ってしまった。「夫婦の旅」は、道中の会話の時間を深めることで、お互いの今までの苦労に感謝し、これかも助け合い生きていくことを確認し合い、絆がより深まる機会にもなる。夫が妻の考え方を理解し、歩調を合わせられるかが楽しい旅のポイントではないかと思う。

研修会に講師として参加する機会が多いので、参加者によく質問することがある。「退職したら誰と旅行をしたいですか」と。年代で多少の違いはあるが、男性の8割は妻と行

きたいと手をあげ、女性は子供、友人と続き、御主人との旅行を望む人は3割にも満たない悲しい現実がある。特に60代を過ぎると女性には夫との旅行を敬遠している。年齢を重ねることに女性は自立心が強く、自分の時間を大切にし、積極的に行動し旅を楽しみたいという傾向が表れている。

また、夫婦旅行の行先は妻が主導権を握っている。日頃の趣味や買物などの消費行動にも表れており、デパートや昼間のレストラン等を見ると、女性の姿であふれている。男性は定年を迎えると、家に引きこもりがちで、妻への依存心が一層強くなる傾向がある。そのことで自由を望む女性が一緒に旅を望まない要因ではないだろうか。

一方高度成長期に粉骨砕身働き、社会を支え、バブル崩壊期には人事面で苦勞を強いられた世代の男性はわがままが多いのも現実で



写真提供：クラブツーリズム

ある。自分が家族を支えたという自負心が強い世代であるが、これからは第2の人生を楽しむ切り替えが必要で、世の中の仕組みやものの考え方についても弾力的にならないと生きて行くことが窮屈になる。

先日、ドルフィンポイントで、桜島を眺めている長野県から来たというご夫婦にお会いした。痴呆症の妻のために、耳元で話しかけながらゆっくりと車いすを押している夫の姿に涙腺が緩んだ。鹿児島の印象について、多様な温泉、桜島の景観、食べ物の美味しさ、人がとにかく優しく親切といていた。心の温かさが残っている鹿児島にはほっとした思いであった。

今消費の鍵を握っているのは女性であり、女性に支持されない地域や商品は淘汰されていくのが世の流れである。旅行においても、自分の我を通すのではなく「牛に引かれて善

光寺参り」のごとく妻の行動に合わせる器量が欲しい。

あらゆるものがデータ化され、ITで一瞬に旅先の様子を検索ができる時代である。しかし旅に出てみると、食事、季節、おもてなし、人との出会い、心の持ちようで旅行の印象は変わる。1年に数回は旅に出て、国内外の観光地を訪ねてはいかがですか。美しい日本、悠久の歴史を持つ国々、多くの人々との触れ合いが、夫婦を目覚めさせ、新たな生きがいをもたらす。

「旅は道連れ、世は情け」、ゆっくりと夫婦で人生を楽しみたいものである。

(鹿児島県観光立県推進会議会長)

